

産科長 就任のご挨拶

平成24年4月1日付けで産科長を拝命いたしました。よろしくお願いたします。

産科は、「生命を紡いでいく」必要欠くべからざる診療科であると自負しております。私は、医師としてのほとんどの期間を分娩に向き合い、平成の世を生きて参りましたが、時代の趨勢により産科診療を取り巻く環境は大きく変転しております。最近、当院における分娩数は約2倍近くに増加し、1000件/年に届く勢いで、全国的にもトップ1-2の分娩数(大学病院)を取り扱っております。と同時に、ハイリスク妊娠・分娩も増加の一步を辿り、より高度な周産期管理が求められています。

●“ふつうのお産”⇒多様な価値観に寄り添う

安全が保障される分娩はありません。分娩は、大きな「イベント」であると同時に、待ったなしの「救急疾患」でもあります。多様化した価値観に応えるために、4月1日より助産師外来を拡充しスタートし、スタッフのスキルアップ、地域周産期コメディカルスタッフの研修機会の拡大を目指しています。また、ハイリスク事例に迅速適確に対応するために、小児科をはじめ各スタッフとの良好なコミュニケーション、協力体制を強化しています。

菅原 準一



●全ての医療プロバイダーとの協調診療を推進

産科診療には、医師以外にも助産師、看護師、臨床心理士、ソーシャルワーカー、コーディネーターの方等全ての職種の皆様それぞれがキープレーヤーとなる場面が多々あります。また、我々の診療は、数多くの診療科の先生方との協調によって、はじめて安全な分娩⇒健全な育児へのリレーが可能となります。今まで以上に病院の各診療科の先生方にご指導いただきながら、ご家族すべてに幸福をもたらす、より良きお産を目指してゆきます。

●被災者オリエンテッドな地域周産期医療の復興

大震災後の地域医療体制を先端ICTにより再構築し、ゲノムコホート研究を通じて、未来型の個別化医療を導入するため、東北メディカル・メガバンク機構(ToMMo)が走り始めました。国家的プロジェクトの地域医療支援部門の一翼を担うため、地域の方々の声なき声に耳を傾け、クロスセクショナルな母子医療支援体制を確立します。